The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	渤海国関連詩文の表現について ： 「海」「距離」の表現を中心に
Author(s)	山谷, 紀子
Citation	語文, 84-85, p. 3-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69053
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

渤海国関連詩文の表現について

――「海」「距離」の表現を中心に――

山谷紀子

はじめに

日本と渤海国（現在の中国東北部・北朝鮮・ロシアの南東部の一部、六九八年～九二六年）との国交は、聖武天皇の神亀四年（七二七年）に始まる。その当時、日本は唐や新羅ともすでに国交があり、来日した外国の使節と詩文を通じた交流があったことは『懐風藻』に残る長屋王の「於二宝宅一宴二新羅客一」など一連の作品から分かる。しかし、長屋王主催の詩宴では、新羅使の作品を見る事ができないのが現状である。これに対して渤海国に関連したものでは、歴史書に両国の国書が載せられ、また勅撰三集には、弘仁五年に来日した渤海使節に関した作品を中心とした詩が残っている。このように、渤海国との交流における大きな特徴として、唐・新羅と比較して資料が多く残っている点を挙げることができる。

渤海国が朝貢という形[1]で我国と国交を結んだため、渤海国の国書の態度をめぐって、宝亀三年正月十六日条「責二問渤海王表無礼於壱万福。（中略）所レ上之表、豈違レ例無礼乎。由レ茲、不レ収二其表一」、宝亀三年正月二十五日条「渤海使壱万福等、改二修表文一、代レ王申謝」のようにたびたび摩擦が起きている。このような状況下では両国ともに文章表現の選択は慎重であったと思われる。そこで本稿では、同一対象への表現の方法について日・渤両国を比較し、また時代順に表現の変遷を整理してみる。具体的には両国の間に広がる「海」と「距離」との表現方法に注目した。

一、「海」の表現―日本国書を中心に―

日本と渤海国との間には日本海を始めとする大海が広がっている。波濤を越える旅程には、陸続きの国に行くのとはまた違う困難が伴った事が想像される。事実遭難事故も多く、日本の送渤海使が遭難する事もあった[2]。海への関心は両国ともに高かったと思われる。ここでは渤海関連の詩文中に散見される「海」の表現に

は時代的変遷があるのか、またその変遷が渤海国との交流から生まれたものであるかについて考察する。

まず、渤海国と国交を樹立した神亀四年以降の歴史書に記載される渤海国関連記事から「海」「波」を含む表現を抜粋し時代順に並べる。対象は勅撰三集に収められる作品の下限である天長五年までとする。

（日本）

①滄波雖レ隔、不レ断二往来。（神亀四年四月十六日）

②使楊承慶等遠渉二滄海一、来吊二国憂。（天平宝字三年二月朔）

③使史都蒙等遠渡二滄溟一、来賀二践祚一。（宝亀八年五月廿三日）

④渤海通事従五位下高説昌、遠渉二滄波一、数廻入レ朝。（宝亀十年十一月十日条）

⑤彼渤海之国、隔以二滄溟一。（中略）但顧二巨海之無レ際、非二一葦之可レ航。（延暦十七年五月十九日）

⑥沃レ日滄溟、企乃到矣。接レ天波浪、葦能乱レ之。（弘仁二年正月廿二日）

⑦凌二鯨波一以修聘（中略）旋渉二大水一。（弘仁六年正月廿二日）

⑧故渤海国使従三位王孝廉、闕庭修レ聘、滄溟廻レ艫。（弘仁六年六月十四日）

⑨絶二綟溟一而掛二帆駿奔滄波一、随二雁序一而輸二絳磬制絳闕一。（弘仁十三年正月廿一日）

⑩使等凌二鯨波一、忘二寒風一参来。（天長元年二月三日）

（渤海国）

⑪而滄溟括レ地、波浪漫レ天（延暦十五年四月廿七日）

⑫差二使奔波一、貴申二情体。（延暦十五年十月二日）

⑬雖二復巨海漫レ天、滄波浴レ日、路無二倪限、望断二雲霞一。（延暦十七年十二月廿七日）

まずは確実に「海」を指していると思われる表現①②③④⑤⑦について考察する。⑤「巨海」は渤海国側に⑬の用例があり、中国の文献にも多数の用例が確認できる表現である。ただし、後述する「滄海」のように特定の海を指す語ではないようである。また、「巨海」は延暦十七年の五月に渤海側が定例を破って啓を省略したことを問いただした璽書⑤と、それに対する渤海国の返答の啓である⑬とに共通して使われており、渤海国の日本側への歩み寄りの一端を垣間見せるようで興味深い。しかし、両国の間で「巨海」が「海」を指す語として主流にはならなかったようである。⑦「大水」は、日本にだけ見られる用例である。日本では「〝水〟を〝海〟に用いることが多い」[3]という指摘から、ここでは「大海」という意味であると推測される。しかし、日本において「大水」は通常「洪水」の意味で使われており、「大海」と同意で使われる日本の用例は管見では見つけられていない。

次に「滄」を頭につけた表現の考察に移ろう。語句の整理をすると「滄海」は日本と渤海両国を隔てる「東海・渤海」を示す語である。また「滄溟」「滄波」は文字通り「あおうなばら・あおい波」といった意味で特殊な意をこめた言葉ではない。ただし、①②③④では「滄波」という言葉で「海」そのものを示そうとし

ていることに留意が必要である。その中でも②③④では「遠渉（渡）」という語と抱き合わせた一種の慣用句の形になっていることは注目に値する。この表現は、『続日本紀』において渤海使関連記事以外でも何例か見出せる。

a 道慈法師、遠渉二滄波一、覈二異聞於絶境一。（養老三年十一月朔）

b 唐僧道栄、（中略）遠渉二滄波一、作二我法師一。（天平元年八月五日）

c 其大僧都鑑真和上、戒行転潔、白頭不レ変。遠渉二滄波一、帰二我聖朝一。（天平宝字二年八月朔条）

d 新羅使蘭蓀等、遠渡二滄波一、賀レ正調レ貢。（宝亀十年十月四日条）

以上の四例は、唐や新羅などから渡海してきたことを示す文脈で使われている。この「遠渡二滄波一」は渡海することを描く場合にしばしば使われた表現といえるだろう。また、②「楊承慶」、③「史都蒙」、④「高説昌」のようにすべて個人名と一緒に用いられている特徴も指摘できる。ところが使用される期間に注目すると、この表現は光仁朝の宝亀年間以降は見られくなる。桓武朝以後は、個人を名指しすること自体ほとんどなくなるが、⑧「故渤海国使従三位王孝廉、闕庭修レ聘、滄溟廻レ艫。」（弘仁六年六月十四日）のように個人名がでてきても、「遠渡二滄波一」を用いることはない。この傾向ははっきりしており、渤海国に宛てた「書」の表現は、光仁朝と桓武朝との間に変化があるということが指摘できる。

もう一つの変化は、嵯峨天皇の弘仁期以降に見られる。桓武朝までは、「滄波」は①②③④のように「渉」とともに用いられて「海」を指すのに対して、嵯峨朝では⑦⑨⑩のように「渉」の語と離れて、文字通り「波」に主眼をおく形になってくる。波の表現がより状態を示すものになり、大きくうねった波を「鯨」「鯢」という語で形容している。海の広さよりも、波の荒さを、ひいては航海の困難さをより具体的に表わそうとしているのである。「波」自体を表現することは、日本に先立って渤海国の用例⑫に「差二使奔波一、貴申二情体一。」とあり、日本の「波」の表現の変化を考える際に参考になると思われる。つまり、波を詳しく表現することは、渤海国側にすでに前例があり、そこからの受容も考えられるが、嵯峨天皇がかの国に倣って積極的に国書に新しい表現を入れようとすることも十分に考えられることだと思われる。嵯峨朝もまた、「書」の中の表現形式の変革期であったといえる。

では、勅撰三集の作品の表現には、国書に見られる表現の変遷は反映しているのであろうか。

二、「海」の表現―勅撰三集の作品を中心に―

勅撰三集に残る渤海国関連詩十九首の内、弘仁五年に来日した渤海使に関したものが十三首とそのほとんどを占める。この他には、淳仁朝天平宝字三年に詠まれた『経国集』153楊泰師「夜聴二擣衣一」、182楊泰師「奉和二紀朝臣公詠レ雪詩一」や延暦年中の作といわれる[4]『凌雲集』83大伴氏上「渤海入朝」などがある。

勅撰三集の渤海国関連詩における「海」の表現を以下に抜粋する。

Ⅰ大海途難レ渉、孤舟未レ得レ廻。
（『文華秀麗集』35坂上今雄「秋朝聴レ鴈寄二渤海入朝高判官釈録事一」）

Ⅱ渤海望無極、蒼波路幾千。占雲遙驟レ水。就レ日遠朝レ天。
（『文華秀麗集』38桑原腹赤「和下渤海入覲副使公賜レ対二龍顔一之作上」）

Ⅲ蒼茫渤海幾千里、五両舟中送二一年。鯷壑難辛孤帆度、鯨濤殺怕遠情伝。（『経国集』127滋野貞主「春日奉レ使入二渤海客館一」）

以上、日本と渤海国との間に広がる海の表現として、傍線を付した三例が指摘できる。すべて弘仁五年から七年にかけて日本に滞在した渤海使に関わる作品である。ただし渤海国側では、王孝廉（『文華秀麗集』16、18、39、40、41）、釈仁貞（『文華秀麗集』17）らが作品を残すにもかかわらず、「海」の用例は見当たらない。

前述の国書と違い詩には「遠渡二滄波一」のような決まった表現はない。一例ずつ典拠や他の用例を検討してみよう。

Ⅰ「大海」は、先ほど考察した渤海関連記事には見出せない語だが、『日本書紀』仲哀天皇八年九月朔条に「便登二高岳一、遙望二之大海一、曠遠而不レ見レ国。」と、朝鮮半島の方向にある海を「大海」という言葉で表現しており、ありふれた普通名詞の使用でこの詩特有の語とはいえない。次に、Ⅱ「蒼波」は、前述のように多くの用例を持つ語である。この詩では、三句目の「占レ雲遙驟レ水。」が「占雲之訳交レ肩、驟レ水之貢継レ踵」（延暦十八年四月十五日条）に四句目の「就レ日遠朝レ天。」が「就レ日遙思眷二我堯一」（『凌雲集』83大伴氏上「渤海入朝」）に類似するなど、波線を引いた部分に日本の前例を参考にしたのではないかと思われる表現が見られる。[5] 詩題に「龍顔」と天皇に関係する言葉がある事も念頭におくと、公式的な雰囲気を持つ詩であると結論付けられそうである。Ⅲ「鯨濤」は前の二例とは違い、荒れる波そのものに主眼を置いた表現である。前述⑦「鯨波」に共通したものと考えられる。ここから史書に載る国書において、弘仁六年頃から意味が変化をきざした「波」の表現を、滋野貞主も時を同じくして使用している事がわかる。滋野貞主の詩のこのような特徴は、嵯峨詩壇との関わりも想定できる。滋野貞主は、渤海国関連詩に限らず嵯峨詩壇の中でも新しい表現をいち早く使う詩人として位置付けられ、「波」の表現もそれを示す例として注目する必要がある。[6]

以上、日本と渤海国との間に広がる「海」の表現について考察してきた。日本側の表現では「遠渡二滄波一」のような決まった形を持つ句もあったが、桓武朝以後では海の大きさとともに波風の厳しさにより重点をおいて描くように変化してきている。この手法を用いるようになった背景として、渤海使の遭難の回数が上げられるのではないか。桓武朝以前の光仁朝では渤海使は来るたびに遭難し、日本側は帰国の船を提供している。[7] そして、そのよう

な表現の方法は嵯峨朝にも受け継がれたが、嵯峨朝では、波の激しさをさらに印象的にし、渤海使の苦難を描き出そうとしている。渤海国側では、「海」を表現した例が少なく、はっきりとした変遷や特徴を示すことは難しい。概して日本側が前述した「遠渡二滄波一」のような決まり文句を多用する傾向があるのに対し、渤海国側は繰り返し使う語が少ない印象をうける。また、「巨海」や嵯峨朝以後の「波」の表現など、一部両国の交流の結果とみることができそうな動きもあるが、両国交流による文章表現への影響という点では、更なる考察が必要であろう。

漢詩の特徴を考察するにあたって、渤海国側には「海」の表現がないので、漢詩と日本の国書との比較のみに焦点をしぼると、個人に宛てた詩が多いのにもかかわらず、「遠渡二滄波一」という表現は直接勅撰三集の詩にはとり入れられなかったようである。このことは、詩の内容に比重がかかる問題であると思われ、「海を越えて苦難の路をきた」というものよりも、遠い異郷に滞在している寂しさをなぐさめる内容のほうが好まれたからであると思われる。「海を越えて苦難の路をきた」という内容は、遠く日本を慕ってきた渤海使をねぎらう性格が強く、個人的な詩にはふさわしくないからであろうか。その点からみるならば、Ⅱ、Ⅲの詩は官人としての立場が強く出ている作品であるともいえる。

公式的な雰囲気の強いⅡ、Ⅲであるが、作品中にもう一つ注目するべき表現がある。点線を引いた箇所のように日本と渤海国との距離を「幾千」という数字を用いて示している点である。次に距離の考察に移りたい。

三、「千里」「万里」考

前述した『文華秀麗集』38と『経国集』127では、渤海国から日本への航海の距離を「幾千里」と表現している。この他にも渤海国に関連した詩文には距離を数字で示したものが散見される。以下に用例を挙げる。

イ策レ騎翩翩何処至、春風千里海西郷。
（『文華秀麗集』24巨勢識人「春日餞三野柱史奉レ使存二問渤海客一」）

ロ万里雲辺辞レ国遠、三春煙裡望レ郷迷。
（『文華秀麗集』36坂上今継「和二渤海大使見レ寄之作一」）

ハ辞レ家里許不レ勝レ感、況復他郷客子情。
（『文華秀麗集』37滋野貞主「春夜宿二鴻臚一簡二渤海入朝王大使一」）

ニ渤海望無レ極、蒼波路幾千。
（『文華秀麗集』38桑原腹赤「和下渤海入覲副使公賜レ対二龍顔一之作上」）

ホ誰言千里隔、能照両郷人。
（『文華秀麗集』40王孝廉「和下坂領客対レ月思レ郷見レ贈之作上」）

ヘ蒼茫渤海幾千里、五両舟中送二一年一。

（『経国集』127滋野貞主「春日奉レ使入二渤海客館一」）

この中でハは京都の鴻臚館、イ・ホも渤海使が出航する予定の出雲との距離を詠んでおり、いずれも国内の距離である。両国の間はロ・ニ・への「幾千里」「万里」が相当する。従って「千里」以上の道のりは日本国外と考えてよいようである。詩の表現では、両国の距離は「幾千里」と「万里」の二つが存在することになる。

歴史書に載る国書の例を見てみると、距離の表現はほとんど見当たらない。

（日本）

褒二国命於西秦、五台之嶺非レ邈。敦二隣好於南夏、万里之航自通。

（天長三年五月十五日）

（渤海国）

伏以、両邦継レ好、今古是常、万里尋レ修、始終不レ替。

（弘仁十年十一月二十日）

両国とも該当する表現は一例ずつである。また日本の用例は両国の距離を厳密に示したものでないと考えられる。これに対して渤海国の用例には、時代は少し下るが「両邦相去、万里有余」（承和九年三月九日条）というものもあり、いずれも両国の距離は「万里」であると述べている。この承和九年三月九日条の渤海国の啓を受けて、日本が渤海国に出した太政官牒には「守二一紀之龍信、凌二千里之鼇波。」（承和九年四月十二日条）とあり、日本における両国の距離の認識は少なくとも渤海国関連詩文からは「幾千里」の方が主流のように感じられる。

では、平安初期の日本において、「千里」「万里」の使い分けには何か基準となるものがあったのであろうか。平安初期までの漢詩における「千里」「万里」の用例を整理して、類題別に作品を挙げる。[8]「幾千」の用例は先に考察した二例のみなので表には挙げない。また、「千万里」という言葉も特殊な例と考え、今回は対象としない。（表の中の数字は、作品番号を示している。）

〈千里〉

	遊覧	宴集	餞別	贈答	楽府	梵門	哀傷	雑詠
『懐』		77		115				
『凌』	62		*22*					51
『文』			21 [24] 25	31 [40]			*64*	97
『経』						58		94 127 176

〈万里〉

	遊覧	宴集	餞別	贈答	楽府	梵門	哀傷	雑詠
『懐』		[79]		117				
『凌』		14	*21* [43]					
『文』	6		19 *22* 26	[36]				*116*
『経』					18 19 20			87 152 163 179 191 205 208 226

『懐風藻』、『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』において、「千里」、「万里」ともに「餞別」「贈答」の類題に属する作品に多く

使用される傾向は一致している。遠くへ去る人、遠くに滞在している人に贈る場合、これらの語が多く使われるという結果は予想通りであろう。国内の距離でも「千里」と「万里」とが両方存在している。ここでは、同じ方向へ行く例として、東北を舞台とした作品で確かめてみたい。

斜体の作品番号は、日本の東北地方を舞台にした五首の作品である。その中で「千里」の用例をもつ作品は『凌雲集』22嵯峨天皇「餞二右親衛少将軍朝嘉通奉レ使慰二撫関東一、探得臣。」、64小野岑守「奉レ和下傷二右近衛大将軍坂宿禰一御製上」の二首であり、「万里」は『凌雲集』21嵯峨天皇「吏部侍郎野美聞レ使二辺城一、賜二帽裘一。」、『文華秀麗集』22小野岑守「留別文友」、116小野岑守「奉レ和レ聴二新鶯一」の三首となる。また、空海の『性霊集』の17「贈三伴按察平章事赴二陸府一詩并序」にも「東涯万里少二一歩一、一姙早馳荒服馴。」と、東北と関係した作品に「万里」の語が見える。「千里」の二例の用例のうち『凌雲集』22嵯峨天皇「餞二右親衛少将軍朝嘉通奉レ使慰二撫関東一、探得臣。」は、「東北」ではなく「関東」へ向かうことを重要視すれば、勅撰三集において東の方向へ「万里」といえば東北地方を指すとも言えよう。このことは、実際の距離もさることながら、まつろわぬ東北という心理的な遠さが背景にあると思われる。東北に関しては、都の官人たちの心情が一致しているためはっきりとした傾向がでたものと思われる。[9]

では、外国への距離はどうであろうか。詩番号を四角で囲ったものが、外国との距離を示す表現をもつ作品である。渤海国関係を除いた三首を挙げる。

ト青海千里外、白雲一相思。
（『懐風藻』77百済和麻呂「秋日於二長王宅一宴二新羅客一」）

チ一去殊二郷国一、万里絶二風牛一。
（『懐風藻』79吉田宜「秋日於二長王宅一宴二新羅客一」）

リ数君為二国器一、万里渉二長流一。
（『懐風藻』43賀陽豊年「別二諸友入レ唐」）

ト・チから新羅使に対しても、「千里」「万里」の両方の例があるが、注目すべきは、リの詩であろう。この作品は延暦二十三年に入唐する友人達との別れを詠んだものと言われている。[10] この遣唐使節には、大使・藤原葛野麻呂を始め、朝野鹿取・最澄・空海など勅撰三集に関わる人々が何人も含まれていた。抜粋した一、二句目は有用な人材がはるか唐へ向かうことを詠んでいる。ここから日本においては「万里」に相応しい距離を持っている国は「唐」という考えがあった可能性が読みとれる。『続日本紀』には「千里」の語は無いが、「万里」は二例見出せる。その中で外国と関わりがあるのは天平十五年正月十二日条の「諸徳等、或一時名輩、或万里嘉賓、僉曰二入師一、咸称二国宝一」である。注には「外国から渡来した僧[11]」とあるが、天平年間は伝戒師の招請に努めた時期であり、実際に天平八年に唐から二人の僧侶が来日していることを考え合わせると、この場合は唐を指していると考えられる。

また後世の例になるが、小野篁が唐客に贈ったとされる詩[12]にも「万里東来何再日、一生西望是長襟。」（『和漢朗詠集』餞別635）とある。「万里」ときいて具体的に思い浮かべる国は唐が一般的だったといえるのではないだろうか。

以上のように考えれば、渤海国が日本との距離を「万里」としているのに対し、日本側が渤海国との距離を「幾千里」と表現したことも説明できると思われる。渤海国にとって日本への路は、唐や新羅など地続きの国と違い、荒れた海を越えるという苦難のものであった。特に渤海使の船は、弘仁二年には日本の船との交換を願い出たりしていて、必ずしも誇れるようなものではなかったようである。これについては渤海王自身も桓武天皇に宛てた啓の中で、「而巨木掄材、土之難レ長。小船汎レ海、不レ没即危。」（延暦十五年十月二日条）と自身の船を「小船」と呼び、航海の危険を訴えている。このような背景から渤海国側は日本への距離を大いに強調したいものであったと考えられる。しかし、日本国は渤海国の先にある大国・唐をいつも念頭においていたのではないか。その両国の心情の差が距離の表現となって現れているのである。

おわりに

渤海関連詩文の「海」と「距離」に関する表現を取り上げて考察した。本稿では、聖武朝から淳和朝までの約百年を対象とし、時間軸に沿って巨視的に考察した。その結果、「海」の表現は桓武朝で変化し、嵯峨朝で多彩に伸展したことが整理できた。一方、「距離」の表現は、漢詩には嵯峨朝・弘仁五年に来朝した渤海使に関連した作品にすでに見られるのに対し、国書では嵯峨朝の次の淳和朝で初めて使用されるという時間的な差があることが確認できる。「千里」、「万里」という距離の表現は多分に主観的な要素を含んでいるため、国書などにはなじまなかったのかもしれない。事実、日本側と渤海国側の表現は一致しなかったのである。

「海」、「距離」の表現ともに、両国とも独自な表現形式をもっており、文人たちの交流によって一致する表現を生み出すまでにはいかなかったようである。しかし、「海」の表現は、渤海国側の表現の傾向を積極的に受け入れた結果、嵯峨朝における変化を引き起こした実例として、また嵯峨朝の革新的な文壇の雰囲気を知る一例として注目されると思われる。

注

（1）神亀四年十二月二十九日条に「其後朝貢久絶矣。至レ是、渤海郡王遣二寧遠将軍高仁義等廿四人一朝聘。」とあり、日本側は朝貢であると考えていた。

（2）宝亀三年九月二十一日条、弘仁二年四月二十七日条などに日本人の遭難の記事が見える。

（3）福田俊昭「大伴氏上の「渤海入朝」詩」（『アジア遊学』56渤海関連詩を読む第三回二〇〇三）。

（4）前掲論文（3）参照。

（5）用例は、すでに日本古典文学大系『懐風藻、文華秀麗集、本朝文粋』（岩波書店　一九六四）の226頁で指摘している。

（6）滋野貞主は応製的表現でも同様の傾向を持つ詩人である。拙稿

「勅撰三集における「応製的表現」の研究」（「國學院雑誌」104―3号二〇〇三）参照。

（7）宝亀三年、七年、十年と遭難記事があり、七年と十年には帰国用の船を与えている。

（8）『凌雲集』の詩の分類は、小島憲之『國風暗黒時代の文學中（中）』（塙書房　一九七九）「一　凌雲集の研究（1）その基礎的研究」一二五二頁、一二五三頁の分類を参考にした。

（9）東北がまつろわぬ地域であったことは、『続日本紀』宝亀二年六月二十七日条「渤海国使青綬大夫壱万福等三百廿五人、駕二船十七隻一、着二出羽国賊地野代湊一。」の表現からもうかがえる。

（10）前掲書（8）一五七八頁参照。

（11）新日本古典文学大系『続日本紀　二』（岩波書店　一九九〇）四一六頁参照。

（12）日本古典文学大系『和漢朗詠集　梁塵秘抄』（岩波書店一九六五）二一三頁参照。

＊本稿の本文は、『凌雲集』は『國風暗黒時代の文學中（中）』（塙書房一九七九）に、『懐風藻』『文華秀麗集』は日本古典文学大系『懐風藻、文華秀麗集、本朝文粋』（岩波書店　一九六四）に、『経国集』は『國風暗黒時代の文學　中（下Ⅰ）』（塙書房　一九八五）、『國風暗黒時代の文學　中（下Ⅱ）』（塙書房　一九八六）、『國風暗黒時代の文學　下Ⅰ』（塙書房　一九九一）、『國風暗黒時代の文學　下Ⅱ』（塙書房　一九九五）、『國風暗黒時代の文學　下Ⅲ』（塙書房一九九八）に、『日本書紀』は日本古典文学大系新装版（岩波書店）、『続日本紀』は新日本古典文学大系12～16（岩波書店）『日本後紀』『続日本後紀』は新訂増補国史大系（吉川弘文館）それぞれに拠っている。作品の上に付した番号は作品番号にそれぞれ対応している。

＊追記　本稿の「一「海」の表現―日本国書を中心に―」と、「二「海」の表現―勅撰三集の作品を中心に―」は、第十五回渤海関係詩研究会（平成十七年三月十三日於早稲田大学）で口頭発表したものに加筆訂正したものである。

―本学大学院博士後期課程修了―